



循環型社会研究会 / Workers Club for Eco-harmonic Renewable Society

循環型社会研究会（略称：循環研）は、次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社会のあり方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取り組みの研究、支援、実践およびそのための交流を行うことを目的に活動するNPOです。
資源のリサイクルや物質循環に注目するだけでなく、自然生態系と調和した地域社会の具体的なモデルを追求し、実現に近づけていくことが私達のテーマです。

循環研セミナー報告

循環型社会の基本問題

講師：NPO法人循環型社会研究会代表 高杉 晋吾 氏

日時：2003年6月18日（水）午後6：30～8：30

会場：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋1-9-10）

講師の高杉氏はフリーランスの評論家として多くの環境問題に取組み、早くより日本が「循環型社会」になっていくことを主張してきた。既に1993年に「環境国家への挑戦 循環型社会を目指して」と題する著書を出しており、現場主義に立ってこの課題に取り組んできた。今回の講演はアカデミックな議論を展開するというよりも、氏のこれまでの体験を踏まえ問題のポイントを話された。

循環型社会研究のこれまでの歩み

冒頭、高杉氏は、現在は大量生産・大量消費・大量廃棄型社会から循環型社会への大きな転換期にあるが、最近現場を歩いている中で「東京湾」の在りようが大きな課題としてあらためて認識されてきたと述べた。

振り返ってみると、戦後、重厚長大産業の育成の中で多くの工業地帯が形成され、同時に官僚統制経済と産・官・財の癒着が生み出されてきた。そうした中で、昭和25年に産業の民主化の一環として過度競争力集中排除法によって日本製鐵（株）が解体され八幡製鉄

（株）が発足し、戦後傾斜生産による経済復興に尽力してきた三鬼社長がその転換期にあたって「国の庇護から脱して自立した企業として出発しなければならない」と決意を示したが、同氏は日航機「木星号」の航空事故により帰らぬ人となり、その志通りにいかない

目次:

循環研セミナー報告 「循環型社会の基本問題」	1
春夏秋冬	3
循環研フィールドワーク報告 「三番瀬 東京湾」	4
循環研水循環ワークショップ フィールドワーク報告「手賀沼見学」	6
ワークショップ報告	7
平成15年度総会議事録	8
事務局からの連絡事項	11

ままに推移した。しかしバブルの崩壊に伴い癒着の崩壊と不良債権問題が表面化し、日本で最高度に発展してきた新日鐵は静脈産業の形成に向けて大きな方向転換を図りエコタウン構築に乗り出した。氏はここに循環型社会のモデルがあると見て、その現場を歩き、著作「北九州エコタウンを見に行く」をまとめた。しかしこの話の中にも多くの反省点があると同氏は捉えている。

循環型社会研究の1つの出発点となったのは、1990年頃に伊那地域における「緑の地球に見合う企業」を目指す企業横断的な動きである。これは伊那テクノバレー産業廃棄物研究会の活動を発端に高杉氏がアドバイザーとなり、天竜川流域全体を視野に入れた“産業と自然との共生を図る活動”へと発展していった。この活動は諏訪の環境まちづくり懇話会、天竜水系の上下流のトータルクリーン活動、諏訪湖の水質検査、参画企業における生産革新など多様な活動を生み出し、この活動を通じて企業、行政、住民の協働のあり方について多くを学んだ。

このような経験を通じて、同氏は環境問題について、住民が中心にあって産業、行政等の関係者との協力関係を築いていくことの重要性を認識すると共に、転換期における活動の難しさも経験してきた。同氏はこれを「転換期とはヤゴが孵化するときのように似ている」と述べている。

東京湾岸の埋立てを考える

東京湾岸の埋立地の状況を示す地図を見ると、これは正に戦後の高度成長の縮図を示している。同氏はあらためて、高度成長は湾の干潟、浅瀬をつぶしてきた歴史でもあると認識している。湾埋立ての発端になったのは、昭和25、6年頃に日本が戦後復興を図るために世界銀行から資金を得る上で、土地も資源もない日本は湾岸を埋めて土地資源を創出することを示唆されたことに由来する。以後、京葉臨海工業地帯の造成へと発展し、この結果、巨大構築物



講演中の高杉代表

が沿岸に林立し、この進行の過程で東京湾及び近海で生活を営んできた多くの漁業関係者は漁業権の放棄をしてきた。現在、東京の高層建造物は更新期を迎えつつあるが、巨額の不良債権を抱えた企業の救済を図るために都市再生法のもとにマンション建設が進められており、ウォーターフロントもその例外ではない。

湾岸の大部分が埋立てられている中で、現在、干潟が残っているのは、盤州干潟、三番瀬だけで、前者は既にアクアラインが通っている。それだけに、三番瀬は自然のままの唯一の干潟であるが、ここに第二湾岸道路建設の計画が密かに練られている。千葉県知事の堂本氏は、三番瀬埋立ての白紙撤回を標榜し知事に当選したが、第二湾岸道路建設については同意している由。既に陸上部分は道路建設が進んでおり、道路計画の青写真もある。第二湾岸道路建設はほんとうに環境に影響がないのか、その科学的な検討もなされておらず、自然を守るためにトンネルを作るという考えも、凝固材による影響、地下水系への影響が懸念されコスト高となり経済的にも無理がある。このような状態の中で、国は「これは未だ構想段階である」と言い、市町村の関係者は「都市計画道路は作っているが第二湾岸道路計画は知らない」との発言をしており、そこに大いなる欺瞞が存在している。このような問題は本来的には住民が参加して決定されるべきものであるにもかかわらず、湾岸に生活基盤を有する住民が阻害されている。

三番瀬の干潟を守るべく船橋市の大野氏らは漁業補償を拒否し反対闘争を展開している。同氏はこの活動を進めるために、サンフランシスコ湾岸の自然保全について同地域の住民がどのような取り組みをしてきたかを現地検証し、これを参考に日本での湾岸の環境保全活動について提案している。サンフランシスコにおける活動は、住民運動を基本にして湾の環境保全計画を策定し、湾の自然生態系を守る法律を成立させてきたもので、住民、行政、産業の協働をどのように進めていくかで示唆される点は多い。

住民を無視して行政と産業による癒着により生じた大きな環境問題として、青森・岩手の不法投棄事件がある。この背景には国の広域廃棄物処理政策があり、遠隔・過疎地にしわ寄せさせる形で不法投棄が日常化してしまった。廃棄物処理は本来的には出来るだけ源流に近いところで処理するシステムを目指し地域循環を考えることが重要である。この点で、問題を起こした豊島における廃棄物処理の新たな方策として、近くの島でガス化溶解炉を設け源流処理を図ろうとしているが、大型のガス化溶解炉が日本でいくつも建設されてくる中で静脈産業自体

が大量生産方式となんら変わらない構造をもっているところは大きな問題である。

まとめ

1つ1つの循環のあり方を歴史の中で考え現地に行き、現実の循環モデル形成にどう関わっていくか、色々な事例を勉強して確かな方向性をつかまねばならない。正に、“虫になって現地を見、鳥になって全体を見通す”ことが大事である。

意見交換

このあと若干の時間であったが、以下のような意見交換がなされた。

- ・ 戦後、鉄鋼産業は「鉄は国家なり」と標榜して産業振興に取組み、豊かな社会の実現に貢献してきたが、今はそのような意識はない。かつて鉄鋼産業に身をおいた一人としては、今は現場主義に立ってゴミ処理問題という具体的な問題に取り組んでいる。
- ・ 「鉄は国家なり」の意識は依然としてある。企業の事業は常に自己目的化しており、色々な点で問題を抱えている。東京湾は今やゴミ捨て場になっており、高層ビルは避難の仕組みができていない。アクアラインも中で爆発が起これば大惨事を引き起こす危険を内在している。このようなことをやめさせるのが住民だ。

- ・ 湾岸政策は依然としてこれまでの惰性で動いている。目先の利が常に追求され、住民が望むまちづくりが歪められている。このような状況に対して住民はもっと賢明に、したたかになる必要がある。

(会員：田中 宏二郎)



春夏秋冬

学校は夏休みに突入したのに、梅雨があげずに、今年の夏の初めは涼しい。しかし、8月に入れば確実に、猛暑がやってくる。ここ数年の猛暑のためか、喫茶店やコンビニなどのエアコンがよく効いて、しばらく居ると寒くなるがよくある。年のせいかもしれないが、涼しさを通り越して寒い。そして、中年の身には障る。そんなことで怒っていたら、最近では地球温暖化防止対策でエアコンの温度を28℃にせよ、とお達しが出たようだ。この室内温度だと、真夏に外出から帰った時は若干辛いものがあると身勝手ながら思う。

この際、思い切ってエアコンに頼らない決意をしたほうが良いのかもしれない。昔の人は本当に暑さの中に涼を求めて、生活の工夫をしている。スダレ、団扇、浴衣、かき氷、打ち水などは実質的に涼しさと呼ぶ。しかし風鈴、金魚売り、水中花、お化けなどは涼しさの風情を演出するだけだ。この夏は、日本の風情に親しみ、浴衣を着て団扇であおいで、風鈴の音で暑さを凌ごう。果たして、比較的涼しい夏の初めの決意は、どこまで続くものなのか。

ポンと抜き裸羅漢がゴクリ飲む

風月

(M)

循環研フィールドワーク報告

三番瀬 東京湾

コーディネーター：大平丸社長 NPO法人ベイプラン・アソシエーターズ代表 大野 一敏 氏

日時：5月17日（土）

内容：船橋港より大平丸に乗り、大潮の三番瀬、第二湾岸道路予定地等を見学。その後、船のキャビンにて三番瀬問題に関する講演（講師：千葉商科大学 竹内 壮一 教授）や意見交換を行った。

◆ 太平丸に乗船

三番瀬（さんばんぜ / 千葉県）見学のため、5月17日（土）朝7時に、船橋市の船橋港インターハーバー内に泊められている太平丸（大野一敏船長）の前に集合しました。

現地に到着すると、「太平丸」と名の付く船が複数あって「いったいどれに乗るんだろう？」。7時に、前日のパーティ後太平丸に宿泊していた高杉代表をはじめ数名が船の中から顔を出し、どの船に乗るのが判明。全員が乗船しました（写真1）。



写真 1：太平丸

三番瀬では主にのりやあさりを獲ることが多いとのことでした。港の近くには獲れたての魚介類を販売するお店がいくつかありました。

なお、三番瀬の海域の範囲はおおよそ以下で囲まれる範囲を指すそうです。

東：船橋航路東端

西：浦安埋立地護岸

北：市川市塩浜地先直立護岸及び船橋市海浜公園

南：浦安埋立地護岸突端と茜浜突端を結ぶ干潮時の水深5m以浅

◆ 三番瀬見学

7時過ぎ、大野船長（写真2）は手馴れた手つきで出航の準備に掛かります。およそ10分後、

太平丸が出航しました。小雨がぱらついており、気温は20度以下と少々寒かったです。太平丸は貝類ではなくいわしを獲る巻き網漁船です。



写真 2：大野一敏船長

船は湾岸を進みます。まず目に飛び込んできたのは、閉鎖されたスキー場。あちこちから「何でこんなものを作ったんだ！」との声が。寒くない場所でスキーをやろうとすれば、エネルギーを多く消費するのは言うまでもありません。

三番瀬の辺りは元々遠洋漁業の拠点で、その後食料産業の工場が増えたとのこと。京都の「おたべ」（八つ橋）の会社の工場をはじめとして、食料加工品工場、化学工場など工場がびっしりと立ち並んでおりました。昔はとても美しくかったという三番瀬の風景の面影はどこへやら…。

船は沖を進みます。晴れていれば赤潮になった可能性があったそうですが、雨交じりの天気でしたので赤潮にはなりません。水の色は透明ではなく、緑色っぽく見えました。

東京湾は日本で航行数が最も多い場所であることに加え、特に混み合う時間帯だったため、行きかう船が多かったです。のりが獲れる海とのことで、のりひび（のりを取るのに使う棒）があちこちにありました。

1時間ほどの航行後、漁港に戻ってきました。海を見た後にまた湾岸の人工的な風景を見ると、いかに多くの自然が失われたかを改めて感じました。

◆ 講演と意見交換

三番瀬見学後、太平丸の船内で千葉商科大学の竹内壮一教授による講演が行われました。竹内先生は三番瀬の保全と復元を求めて活動している「三番瀬を守る署名ネットワーク」の代表を務められています。

竹内先生から、三番瀬は多くの生き物がいる湿地として大きな価値があることが説明され、これまでの東京湾埋め立ての経緯、三番瀬反対運動の歴史等が紹介されました。

続いて、参加者による意見交換が行われ、活発な議論が展開されました。湾岸の開発という問題は、都市のあり方という問題複合体の一部であるという認識を参加者で共有し、意見交換を終了しました。



写真 3：竹内壮一先生（右から二人目）を囲んでの講演・意見交換

三番瀬を海から眺めるという貴重な体験を踏まえて、循環研としても東京湾埋め立て問題に注目していきたいと考えています。

最後に、大野一敏船長、竹内壮一先生、どうもありがとうございました。

（事務局： 河野 小夜子）

* 循環研ホームページ内に、今回の三番瀬見学の報告ページを設けております。

<http://www.nord-ise.com/junkan/030517sanbanze/>

-事務局員のひとり言-

船橋のB.P.A.

「バカで、パーで、アホーの略だよ。俺たちのこと。」

そう言って、夜の船橋港に浮かぶ太平丸のデッキの上で、ワインをあおりながら大野一敏氏は力強く笑った。大野氏が代表をつとめるNPO法人ベイプラン・アソシエーターズのB.P.A.という略をもっているのだ。

三番瀬フィールドワークの前夜、NPOまちねっとふなばし『船橋の海を活かしたまちづくり』出版記念会へ参加した我々は、大野氏の遊び心あふれる太平丸のキャビンで高杉代表を囲んでの2次会も早々に切り上げて、翌朝のフィールドワークにそなえて休もうとしていた。そこへ出版記念会の打ち上げから引き上げてきた大野氏が、地元の仲間と一升瓶より大きそうなワインボトルとともに再び現れて、デッキの上で潮風に吹かれながらの楽しい宴が再開した。そこがコンクリートでおおわれ工場や倉庫が立ち並ぶ東京湾岸であることをしばし忘れ、B.P.A.の高らかな笑いとともに、ただひたすらに宴に酔った。

土地あるいは場所というものには、そこに特有の空気のおいのようなものがある。最近では、近代的なものによって覆われた空間やその中で日々の生活の中で、なかなかそういう濃密な空気につれ、またそれによって不思議な感覚におそわれてグッとくることは少なくなったのかもしれない。しかしそれでも特有の空気のおいのようなものは、たとえ微かにであれ残っていて、何かの折にふと顔をのぞかせる。これを感じ取る感覚の力こそが、両義的だが、古いものを守る力の源でもあり、新しいものを創造する力の源でもある。

宴に酔いながら、生活するという事は、B.P.A.の笑いなのだと思ふ。そのとき、笑い声の振動が大きくなり、工場や倉庫が立ち並ぶコンクリート空間に亀裂が走る音がたしかに聞こえた気がした。

(S)

循環研水循環ワークショップ・フィールドワーク報告

手賀沼見学及び美しい手賀沼を愛する市民の連合会年次総会記念講演会

コーディネーター：水循環ワークショップリーダー 川原 啓佑 氏

日時：6月8日（日）

内容：千葉県手賀沼の水の館で説明を受けた後、手賀沼を船上より見学。水の館に戻り、講演「手賀沼の水循環回復計画と地下水」（講師：千葉大学 佐倉 教授）

手賀沼は湖沼水質の全国ワーストワンを27年間続けたが、昨年末環境省から発表された平成13年全国湖沼水質調査で、ついにワーストワンを返上した（表1参照）。これは、「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」の副会長を務めていたわが水循環ワークショップのリーダー川原啓佑氏にとっても嬉しいビッグニュースだったようだ。

今回の手賀沼でのフィールドワークは、川原氏の提案によるもので、手賀沼のほとりに建つ「水の館」での展示による手賀沼に関する説明、遊覧船による手賀沼の船上見学、美しい手賀沼を愛する市民の連合会年次総会記念講演会の3部構成であった。

まず、「水の館」では、ボランティアの説明員により手賀沼の歴史が説明された。戦後の大規模な干拓事業によって、その面積の約45%が埋め立てられた。時期を同じくして柏市、松戸市など周辺での住宅団地や工場団地の開発が進み、人口が急増。その結果、湧水など自然の水源地が減る一方、大量の生活廃水が手賀沼に流れ込み、水質は昭和40年代から急速に悪化した。そして昭和49年以来日本で最も汚れた（COD値）湖沼となっていたということだ。

平均水深は0.86mと浅く、戦後の開発で半分近くが埋め立てられたとはいえ、その面積は6.5km²で東京ディズニーランドの約14倍と広い。船上見学は、まわりの景色も変化に富んで見応えがあった。ボランティアの方々の船上ガイドも地域の観光、文化、生物、環境問題と多岐にわたり、聴き応えがあった。手賀沼の汚れの一因は約2週間と長い水の滞留時間にあるらしい。最近、急速に水質改善が進んだ理由は、北千葉導水によって、最大毎秒10tの利根川の水が手賀沼の上流部分に導入され、沼の水を希釈したと同時に、水が流動化し水の滞留時間が短縮され植物プランクトンの増殖が抑えられたことが効いているようだ。

船上では、水の透明度を上流と下流で比べて見せてもらったが、確かに大きな違いがあった。利根川の水が導水されている上流のほうが

水は澄み、流速が弱まりプランクトンの増殖が進む下流では透明度が下がるということらしい。

講演会は、「手賀沼の水循環回復計画と地下水」というテーマで千葉大学の佐倉教授によるもの。まず、地下水流動に関するお話をされ、都市化により周辺での地下水の涵養がなされず、湧水が減ったことも手賀沼の水質汚濁の一因であると指摘された。また、世界水フォーラムでも紹介された「手賀沼水循環回復行動計画」にも触れられた。

同計画では、「健全な水循環の回復」こそ手賀沼の再生につながるとして、水量の確保 水質の改善 生物生息環境の再生 水と人との関わり合いの強化の4つの視点から、63項目の具体的な行動メニューについて、対象となる地域・流域と関係者の役割分担を明記。そのうち主な取組みについては数値目標など具体的な目標を定めている。行政、NPO、住民、事業者が参画する「計画推進協議会」を立ち上げ、取組みのチェック、推進を図るとしている点もユニークである。

手賀沼の健全な水循環が関係者の努力によって回復し、長期の目標とされている「かつて手賀沼と流域にあった美しく豊かな環境の再生と環境基準の達成」が早期に実現することを祈りたい。

（会員：久米谷 弘光）

平成13年度				平成12年度			
順位	あてはめ 水域名	都道府 県名	年間 平均値	順位	あてはめ 水域名	都道府 県名	年間 平均値
1	佐鳴湖	静岡県	12	1	手賀沼	千葉県	14
2	手賀沼	千葉県	11	2	佐鳴湖	静岡県	12
3	印旛沼	千葉県	9.5	3	印旛沼	千葉県	10
4	春採湖	北海道	9.2	4	長沼	宮城県	9.6
5	伊豆沼	宮城県	8.8	5	涸沼	茨城県	9.5
	八郎湖	秋田県	8.8				
	油が淵	愛知県	8.8				

（環境省のHPより転載）

ワークショップ活動報告

水循環ワークショップ

水循環ワークショップでは、初年度は問題の把握と認識を深める時期として、立体的にセミナー等の企画と参加を主として進めています。近況次の通りです。

【第3回世界水フォーラム】

3月16日～23日京都、大阪、滋賀で開かれた第3回世界水フォーラムに当ワークショップリーダーが地下水分科会等に個人資格で5日間参加した。世界的に迫りつつある淡水資源不足とそれによる食糧危機構図、特に水循環問題については地球温暖化が地球の水循環をまたらに攪乱し、洪水、渇水の程度を拡大するetc・・・。日本で初めての182カ国24,000人参加の世界水大会は、今後の当ワークショップの参考となった。報告要旨は循環研事務局にある。

【雨水の有効利用セミナー企画と参加】

3月28日雨水問題の最高権威である村瀬誠氏による雨水利用セミナーを企画、実施した(詳細は循環研通信次号以降に掲載予定)。当ワークショップは水循環を二次元に偏せず、垂直軸と次世代への時間軸を加えた四次元水循環を考究しようとしているわけで、村瀬氏の雨水セミナーは垂直軸の循環として極めて有意義であった。

【手賀沼見学フィールドワークと千葉大・佐倉教授講演会参加】

6月8日(日)千葉県手賀沼親水広場水の館を中心に、当会より8名が参加した。全国湖沼水質ワーストワンを27年間続け、都市化による水循環破壊の典型であった状況から、近年市民と行政が改善に努力を重ね昨年ワーストワンを脱却し、改善ベストワンを目指せるようになった手賀沼を船上見学した。続いて千葉大の佐倉教授(日本地下水学会会長、世界水フォーラム地下水分科会責任者、手賀沼水循環回復行動計画策定委員会委員長)の地元NPO主催講演会に参加し「地下水流動の基礎 健全な水循環のイメージ 手賀沼の湖水と地下水 世界水フォーラムで紹介された手賀沼、について説明を受け質疑応答を熱心に行った。

【今後の計画】

7月17日循環研セミナー「東京の水問題と地下水」(嶋津氏)に続き、国土交通省水資源局の担当者、大阪市大・中川康一教授等をお招きすることを検討中。

エネルギーワークショップ

このワークショップでは次の二つの面についてほぼ1回/月の間隔で学習・研究を進めてきた。

- ・ エネルギー需給全体に関する情報を収集し、当面している課題について広く考察する。
- ・ 再生可能エネルギー活用の事例について調査し、NPOとしてどんな活動が出来るか検討する。

【第3回会合】2003年3月27日

- ・ 政府が進めている「バイオマス・ニッポン総合戦略」の概要と、その中で「バイオディーゼル燃料、バイオエタノール燃料への活用」としてどんなプロジェクトが進められているか、についてレビューした。
- ・ 環境格付けについて、各所で試行している内容について学習し、「循環型社会形成への貢献」という格付け概念について今後の研究課題とした。

【第4回会合】2003年5月8日

- ・ 「化石エネルギー社会」から「水素エネルギー社会」への転換について、政策の現状と今後の展開について各界資料を集めて考察した。
- ・ バイオマスエネルギーを水素に転換して燃料電池で発電する方式はエネルギー需要地での小規模・分散型であり、どのように社会構成に取り入れられていくか調査・研究を継続する。

【第5回会合】2003年6月26日

- ・ 再生可能エネルギー利活用の実例について資料を持ち寄りレビューした。
- ・ NPOが行っている風力発電、太陽光発電など自然エネルギー利用推進の事例。
- ・ 木質バイオマスエネルギー利用を高める方策としてペレット化の状況と、各所で高まっている利用活発化のネットワーク作りについて情報を分析し、この活動に参加していくことを検討した。
- ・ 京都府ノ八木町のバイオエコロジーセンターや帯広畜産大などでの家畜糞尿利用のバイオガスプロジェクト、また神戸での生ごみ利用の実証プロジェクトについて、その内容を学習した。
- ・ 今後も事例調査は継続するが、次回にはNPOとしてどのような協働モデルが考えられるか、意見を持ち寄って研究することになっている。

平成15年度特定非営利活動法人循環型社会研究会総会 議事録

日時：2003年5月23日（火）18:30～20:30

場所：ノルドスペース セミナールーム

参加者：21名（出席者：14名、委任者：7名、うち団体会員2）

<代表挨拶（高杉晋吾氏）>

循環型社会研究会代表の高杉氏より、以下のような主旨の挨拶がなされた。

- ・ 任意団体として活動を開始してから10年間、地域と生態系を点や線ではなく面として捉えることによる循環型社会を目指して活動してきた。
- ・ 現在は、対立を特徴とする公害時代から、住民を土台に企業と共同し行政がサポートするという共同決定の時代への転換期にある。様々な価値基準が変わっていくため、新時代の変遷に応じて柔軟な頭で考えていかなければならず、そのためには現実を知っていくことが重要である。
- ・ 従来、循環型社会研究会は現場主義を重視してきたが、まだ地域住民との関わりが不十分である。地域住民に手をさしのべ、手をさしのべられるという関係へ向けての大事な集まりとしていくためにも本総会を成功裡におさめたい。

<主要議事要約>

【議長選任】平成15年度特定非営利活動法人循環型社会研究会総会の議長に、全会一致で山口民雄氏が選任された。

【議事録署名人選任】平成15年度特定非営利活動法人循環型社会研究会総会の議事録署名人に、全会一致で三沢和弘氏及び及川陽子氏が選任された。

1. 開会挨拶（山口民雄氏）

山口議長から、出席者14名、委任者7名（総数37名）により、循環研会員37名の2分の1以上の出席があるため、定款第27条に従い、総会が成立したことが宣言された。

2. 第1号議案：2002年度活動報告の件（事務局 後藤大介氏）

- ・ 事務局後藤氏より、2003年4月18日の理事会で承認された「平成14年度事業報告書」（*）、「[参考資料]循環型社会研究会活動報告（2002年度）」（*）を参

照しながら、2002年度の活動報告がなされた。

3. 第2号議案：2002年度決算報告の件（事務局 吉川紀子氏）

- ・ 事務局吉川氏より、2003年4月18日の理事会で承認された「平成14年度会計収支計算書 設立の日（平成14年7月3日）から平成15年3月31日まで」（*）、「平成14年度貸借対照表」（*）を参照しながら、2002年度決算報告がなされた。

* 決算報告後、山口議長の要請により、各ワークショップの活動内容について各リーダーから報告がなされた。（エネルギー：荒川会員、水循環：川原会員、棚田：高杉代表、山口議長）

【採決】第1号議案及び第2号議案につき、全会一致で承認された。また、本承認により行われる東京都への2002年度活動報告及び決算報告において、東京都からの指導に基づく修正を行う権限が事務局にあることが確認された。

4. 第3号議案：2003年度活動計画案の件（事務局 久米谷弘光氏）

- ・ 事務局久米谷氏より、第3号議案及び第4号議案につき、具体的内容及び運用については新理事会において適宜、意思決定が行われる旨、説明された。
- ・ 事務局久米谷氏より、2003年4月18日の理事会で承認された「平成15年度事業計画書」（*）を参照しながら2003年度活動計画が報告された。

5. 第4号議案：2003年度予算案の件（事務局 久米谷弘光氏）

- ・ 事務局久米谷氏より、2003年4月18日の理事会で承認された「平成15年度特定非営利活動に係る事業会計 収支予算書」（*）、「平成15年度収益事業会計 収支予算書」を参照しながら、2003年度予算案が報告された。

- ・ 山口議長より、新活動内容、新ワークショップの要望等の存否の動議が提議された。
- ・ 荒川会員より、新規入会者を増やすことの必要性とそのための広報活動（特にIT時代に対応するもの）の重要性が指摘された。
- ・ 高杉代表より、東京湾（特に三番瀬問題）に関するワークショップを設置することが提案された。
- ・ 田中会員より、休眠ワークショップがあるので、高杉代表提案の東京湾に関するワークショップを休眠ワークショップの1つであるエココミュニティ・ワークショップで行うという提案がなされた。また、各ワークショップに対する予算配分につき、既に実体のあるワークショップに優先配分するという提案がなされた。
- ・ 高杉代表より、東京湾に関するワークショップについての田中会員の提案につき、具体的なワークショップはそのまま特定の実施するという対案が提示された。
- ・ 山口議長より、新活動内容、新ワークショップの要望等の存否についての動議につき、休眠ワークショップの取り扱いを含めて新理事会で検討、確定するという動議が提議され、承認された。
- ・ 事務局古賀竜矢氏より、事務局においてWeb上での広報の再構築を予定している旨、説明がなされ、これについて意見が求められた。
- ・ 山口議長より、全会に対し、広報については各会員、理事会、各ワークショップにおいても継続的検討を行うとともに、今後、広報に関する意見、要望等があれば、事務局に対しても連絡するよう要請された。

【採決】第3号議案、第4号議案につき、全会一致で承認された。

6. 第5号議案：定款第13条第1項（1）号の変更及び役員改選の件（事務局 久米谷弘光氏）

- ・ 事務局久米谷氏より、運営上の必要性による理事増員の案件につき、2003年5月19日の理事会において総会議案として承認された定款第13条第1項（1）号規定の「3名以上10名以内」を「3名以上15名以内」に変更することの可否につき提議された。

【採決】第5号議案前段の定款第13条第1項（1）号の変更につき、全会一致で承認された。

- ・ 山口議長より、定款附則の3により役員の任期が2003年5月31日をもって満了することから、新役員の立候補が要請され、立候補者がいないことから、事務局久米谷氏より、2003年5月19日の理事会において総会への推薦が承認された新役員候補者が次の（A）（B）の通り提示された。
- ・ （A）現行役員の再任：理事再任候補者として、石川（高杉）晋吾氏、及川陽子氏、久米谷弘光氏、下鳥弘氏、田中宏二郎氏、三沢和弘氏、山口民雄氏（以上7名）。監事再任候補者として、畑乾二郎氏（以上1名）。
- ・ （B）第5号議案前段の定款第13条第1項（1）号の変更が総会で承認された場合の役員候補者：荒川忠男氏、石澤清史氏、川原啓佑氏、渡嘉敷奈緒美氏、（以上理事候補者4名）。また、高杉代表より、（B）該当の新理事候補として、藤井勲氏が追加推薦された。
- ・ 但し、（B）については、総会において選任が承認された場合には次の通りとする。1、定款第13条第1項（1）号の変更が東京都により認証され効力が発生した日をもって就任するものとする。2、本就任形態を定款第13条第1項（1）号の変更の効力発生時の役員増員とみなし、役員増員時の任期を規定する定款第16条第2項により、任期を（A）の理事と同様とすること。3、定款第13条第1項（1）号の変更の効力が発生するまでの間、理事会への出席権及び意見表明権（但し議決権を有さない）を有するものとする。

【採決】第5号議案後段の役員改選につき、（A）理事再任候補者7名、監事再任候補者1名、（B）第5号議案前段の定款第13条第1項（1）号の変更の効力発生時に就任する新理事候補者5名の選任が全会一致で承認された。

【就任承諾】第5号議案後段の採決後、各新理事及び新監事（（B）該当者を含む）により、就任（（B）該当者については定款第13条第1項（1）号の変更の効力発生時の就任）を承諾する意思表示及び就任の挨拶がなされた。山口議長より、この就任承諾の意思表示により、（A）該当の再任者は、2003年6月1日をもって新任期間が開始することが宣言された。

7. 事務局による確認事項（事務局 久米谷弘光氏）

- ・ 事務局久米谷氏より、会員名簿を会員へ配布すること、及び配布に際して各会員による非公開要求事項のみを掲載しないことにつき確認が要請され、全会一致で確認された。
- ・ 事務局久米谷氏より、定款第20条第2項に基づき、2003年度より事務局職員が下記の通りとなったことが報告された。
- ・ 旧事務局職員：後藤大介氏、松本聡氏、吉川紀子氏（以上3名）。新事務局職員：吉川紀子氏（留任）、古賀竜矢氏、河野小夜子氏、藺巴晴氏（以上4名）。

8. 閉会

議長の山口氏より、全議題の終了が宣言され、閉会した。

* 別紙書類については、総会前に全会員に郵送にて配布済みです。

事務局からの連絡事項

【調査研究事業助成費 支給対象ワークショップの募集】

今年度から循環研では、会員による自主的研究活動の活性化を図るため、ワークショップ活動に調査研究事業助成費を支給することになりました。現在活動しているワークショップ、これから立ち上げようとしているワークショップで、調査研究事業助成費支給を希望する団体は、以下をよくお読みになって事務局（担当：吉川）までご応募ください。

ワークショップ調査研究事業助成費 応募要領**

1.支給条件(下記 の条件を満たすワークショップ)

活動計画書の提出

(形式自由。記入事項については下記「2活動計画書に明記する事項」参照。)

活動成果を循環研通信または総会で報告すること

2.活動計画書に明記する事項

ワークショップ名

リーダーおよび参加者(会員3名以上)の氏名

活動目的・活動内容

今年度の活動計画

3.対象ワークショップ数：6つまで

4.支給額：上限2万円(平成15年度)

5.支給方法：領収書等を添付した使途報告に基づいて年度末に支給

応募するワークショップは活動計画書(上記2参照)を、8月15日までに事務局(担当：吉川)宛にメールまたは郵送でお送りください。理事会において承認されたワークショップには、事務局より支給承認のお知らせをさせていただきます。

会員のみなさまの積極的なご応募をお待ちしております。以上、不明点などございましたら、事務局(担当：吉川)までご連絡ください。

【循環研通信への投稿募集】

会員の皆様からの循環研通信への投稿を随時募集しております。是非とも活発なご投稿をお願いいたします。

どのような形態でも結構ですので(論文、日々の雑感、批評、情報提供、お知らせ、詩歌、等々)、会誌を通じて、会員の皆様や社会へ向けてなにかを伝えたいことをお持ちの方は、お気軽に事務局(担当：藺[その])までご連絡ください。編集の都合上、掲載させていただくことができない場合等がございますので、あらかじめご了承ください。

<投稿要領>

1. 原則として電子媒体(メール添付、フロッピー郵送など)
2. 原則としてテキスト形式。Word形式の場合には、特殊文字使用、2段組編集をなるべく行わないでください。
3. 送付は、循環研事務局(担当：藺)までお願いします。

【事務局ワーキング】

このたび、事務局では、循環研の活動企画や運営などの事務局作業を会員の皆様とともに行うべく、1～2ヶ月に1回ほど会員有志と事務局員が共同作業を行う「事務局ワーキング」を開くことといたしました。

これまで、循環研の「総務・一般広報」「ホームページ・Web広報」「イベント」「会誌編集」「総会・理事会運営」といった企画・運営活動を事務局によって行ってまいりましたが、会員の皆様には、あまり関わっていただく機会はありませんでした。事務局員一同、ぜひとも会員の皆様が主体的に循環研を盛り上げていくことができるような場を設けたいと考えております。会員の方であれば、どなたでもご参加いただけます。

先日開催されました本年度総会におきましても、高杉晋吾代表より、循環研の現場主義と協働の理念が再確認されました。そのための一歩として、事務局員一同、是非とも会そのものの運営の現場において皆様とともに協働して循環型社会を構想し、形作ってゆければと願っております。

当初は、適宜、事務局のほうで発生した企画・運営活動について事務局ワーキングを設けますが、会員の皆様からも「この様な運営活動に関わりたい」というご要望やご提案がございましたら、随時、事務局(担当：園[その])までご連絡ください。

＜第1回事務局ワーキングを下記の通り開催いたしました＞
 日時：2003年7月25日 午後5時～午後8時
 場所：循環型社会研究会事務局・ノルドスペース
 ワーキング内容：
 ・ 循環研通信2003夏号の発行作業
 ・ 循環研通信2003秋号の編集企画、など

次回事務局ワーキングは未定ですが、ホームページ、メール等で告知いたします。

【循環型社会関連書籍のご案内】

事務局では以下の書籍を販売しています。お気軽にお問い合わせください。価格は、税/送料とも含まれていません。

高杉晋吾著「崩壊する産廃政策 ルポ：青森・岩手産廃不法投棄事件」日本評論社(1,500円)

高杉晋吾著「北九州エコタウンを見に行く：循環型産業都市モデル」ダイヤモンド社(2,800円)

高杉晋吾著「循環型社会の『モデル』がここにある：時代を切り拓く『勇者』の条件」ダイヤモンド社(2,400円)

科学物質過敏症支援センター「化学物質フリー社会の構築に向けて：CSフォーラムin中伊豆」脱化学物質ブックレット1(600円)

循環研通信/JUNKAN No.6

2003年7月発行

発行人：高杉 晋吾(代表)

編集責任者：園 巳晴(事務局)

デザイン：古賀 竜矢(事務局)

特定非営利活動法人循環型社会研究会

東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー

株式会社ノルド内

Tel: 03-5524-7334 Fax: 03-5524-7332

Eメール: junkan@nord-ise.com

HP: <http://www.nord-ise.com/junkan/>